

令和 5 年 5 月 9 日現在

機関番号：13802

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2018～2021

課題番号：18H03073

研究課題名（和文）認知症高齢者の尊厳を守る臨床看護実践能力シミュレーションプログラムの開発

研究課題名（英文）Development of the clinical nursing practice ability simulation programs in order to respect the dignity of elderly people with dementia

研究代表者

鈴木 みずえ（Suzuki, Mizue）

浜松医科大学・医学部・教授

研究者番号：40283361

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 12,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は急性期病院における看護師を対象に、同プログラムの有効性の検証を行うことである。対象者は71名、所属病棟は外科系・内科系など60名（85.7%）、認知機能障害のある患者の入院は半数程度が最も多く30名（42.3%）であった「点滴・中心静脈・経管栄養などのチューブを抜かないように、ミトン型手袋をつける」を低減できる自信(self-efficacy)、急性期病院の認知障害高齢者に対するパーソン・センタード・ケアをめざした看護実践自己評価尺度等の合計点が介入後、有意に増加していた。本介入プログラムは参加者が簡単に学習し、実践できる有効な介入であることが示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の特徴はパーソン・センタード・ケアの特徴である認知症の人の視点を理解するためにウェアブルカメラを用いた入院中の認知症高齢者の一人称動画プログラムも含めた認知症高齢者動画教材の開発である。7対1の看護基準を算定する急性期病院における看護師を対象に、パーソン・センタード・ケアを基盤としたe-learningによるプログラムの有効性の検証を行った。急性期病院の認知症看護の質向上、身体拘束の低減に有効であることが示唆された。今後、各病院で本プログラムを活用することで、認知症高齢者に関連したチューブ類の自己抜き、転倒・転落等の医療事故の低減等、超高齢社会の保健・医療・福祉に与える影響も高い。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to validate the effectiveness of the developed e-learning programs for nurses in the acute care setting. This study was introduced to nurses of the hospital. Interested nurses were asked to attend “Developing programs for Dementia nursing intervention ability”. A questionnaire to evaluate program effectiveness asked about consciousness of the dementia nursing with four items on “Interest in nursing of people with dementia”. The degree of self-efficacy was assessed in terms of attaching mitten type gloves as a physical restraint to avoid the pulling of tubes. The self-assessed scale of nursing practice for elderly with cognitive impairment, which aimed to person-centered care in an acute care hospital, revealed that the total score of each of the Approaches to Dementia Questionnaire significantly increased. It was suggested that the intervention program of this study was effective and that nurses could easily learn after intervention.

研究分野：老年看護学

キーワード：急性期病院 認知症 パーソン・センタード・ケア e-learning

## 1. 研究開始当初の背景

わが国では急性期病院における認知症医療や看護の質向上や身体拘束低減を目的に、2016年度診療報酬改定に「認知症ケア加算」が新設された<sup>1)</sup>。認知症ケア加算の算定病棟では身体拘束率は42.0%であり算定病棟の方が有意に低かったが、全体の身体拘束率は44.5%と認知症高齢患者の4割以上に身体拘束が行われているのが現状である<sup>2)</sup>。

認知症の行動・心理症状 (Behavioral and Psychological Symptoms of Dementia: BPSD) に対する非薬物療法に関しては、認知症の人の視点からのアプローチであるパーソン・センタード・ケア<sup>3)</sup>を用いた介入の効果の有効性が指摘されている<sup>4)</sup>。欧米では急性期病院に身体疾患で入院した認知症高齢者に対してもパーソン・センタード・ケアに関する研修や認知症に対する意識の改善によるケア実践の質の向上が報告されている<sup>5-7)</sup>。急性期病院においては身体疾患の治療が中心であるが、わが国においても認知症高齢者の視点から BPSD の原因を分析して、本人の価値や人間性を重視した質の高いケアをめざすパーソン・センタード・ケアの導入が必要である。著者らは認知症看護の研修プログラムとして、認知症模擬患者や視聴覚教材を開発<sup>8,9)</sup>してきた。

## 2. 研究の目的

本研究ではパーソン・センタード・ケアを基盤とした e-learning による認知症看護実践能力育成プログラムを開発した。本研究の特徴はパーソン・センタード・ケアの特徴である認知症の人の視点を理解するためにウェアラブルカメラを用いた入院中の認知症高齢者の一人称動画プログラムも含めた認知症高齢者動画教材の開発である。本研究の目的は 7 対 1 の看護基準を算定する急性期病院の看護師を対象に、パーソン・センタード・ケアを基盤とした e-learning によるプログラムの有効性の検証を行うことである。

## 3. 研究の方法

### 1) 対象者

研究対象者は、認知症高齢者が入院している内科・外科系病棟・集中治療室などに所属し、認知症高齢者に直接ケアをしている常勤看護師とした。なお、専門看護師・認定看護師の資格のあるものは除外した。A 市内の 7 対 1 看護基準を算定している全 7 施設 1944 名に対して応募のチラシを配布して参加者を募集し、縦断的介入研究(介入のみの準実験研究)を行った。

### 2) 介入方法

研究のプロセスを図 1 に示した。2020 年 4 月から 1 か月間、各病院の看護部長から研究参加の応募チラシを配布し、参加希望者には個別に研究事務局にメールにて応募してもらった。対象者に事務局から研究参加に必要な事項 (WEB サイト、ID、パスワードなど) をメールにて送付した。5 月にベースライン評価として、日本語版 Survey Monkey を使用して WEB にて介入前の対象者に自記式のアンケートを実施した。その後、対象者は WEB を用いて「e-learning: 認知症看護実践能力育成プログラム (4 週間)」を受講した。アンケートは、受講前 (ベースライン)、受講直後 (1 か月後)、実践 3 か月後、実践 6 か月後の計 4 回実施した。

本プログラムは本研究のために研究者らが開発したものであり、目的は急性期病院における看護師がパーソン・センタード・ケアを基盤とした看護実践能力を取得することである。プログラム開発後に認知症看護認定看護師や老人看護専門看護師の合計 16 名のエキスパートパネルに本プログラムの妥当性や臨床における有効性に関するアンケート調査を実施した。アンケート調査の「プログラムの妥当性」では「身体疾患のある認知症高齢者に対する看護の実践に必要な専門知識が網羅されている」など (4 項目)、「実践に対する有効性」では「病院の看護師の認知症看護の実践の向上の効果がみられる内容である」など (6 項目) の合計 10 項目に関して、「1: 全くそう思わない」～「4: とても思う」の 4 件法で評価を依頼した。集計結果から平均値は 3.8 以上であったことから妥当性・有効性があると考えた。受講期間は研究者間のディスカッションで 4 週間とし、さらに上記のアンケートにおける「プログラムの妥当性」として、「4 週間受講期間は病院の看護師の学習可能な量である」に対して、全員から「4: とても思う」と回答を得たことから本プログラムの受講期間は 4 週間が妥当であると判断した。本プログラムはパーソン・センタード・ケアやせん妄の基礎的内容のほか、認知症高齢者の一人称視点動画を用いた事例に基づく認知症看護実践の学習で構成され、参加者は 4 週間にわたって自宅等で受講した。各週の学習にかかる時間は 30 分程度である。e-learning は、参加者が各自の好きなタイミングでサイトにアクセスして受講が可能であるが、4 週間で順番に受講を依頼した。プロセスの内容に関する質問は、メールにて随時対応した。また、e-learning 受講直後に対象者に本プログラムで学んだ内容をまとめた「病院におけるパーソン・センタード・ケアを基盤とした認知症高齢者の看護のポイント (ポケットサイズ版)」を 2 部郵送し、実践後の 3 か月間、6 か月間に臨床の現場で携帯し、活用して実践するように依頼した。

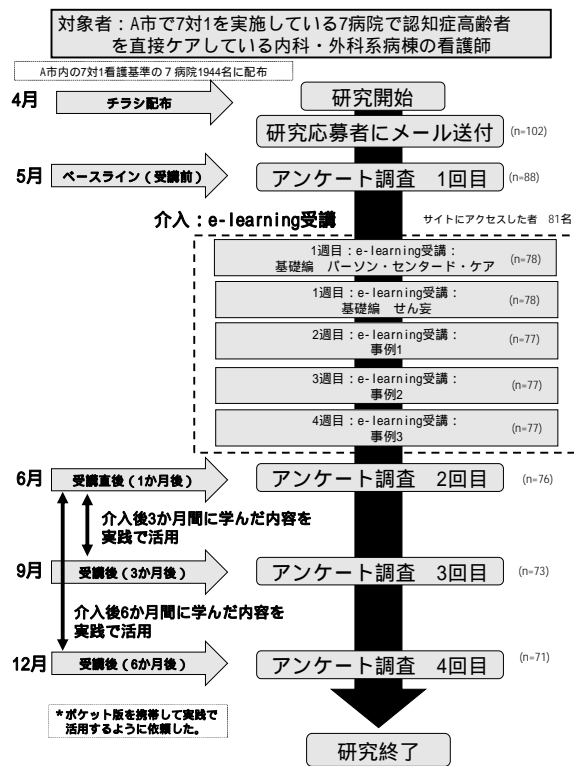


図1 研究のプロセス

### 3) 評価項目

本プログラムは、急性期病院における看護師がパーソン・センタード・ケアを基盤とした看護実践能力の取得に関して必要な専門知識である認知症のパーソン・センタード・ケアを学ぶことを目的に、パーソン・センタード・ケアやせん妄に関する専門知識、認知症高齢者の視点からの1人称動画を通して身体拘束低減に関する具体的な臨床倫理や看護方法を構成した。

- (1) パーソン・センタード・ケアに関する意識：日本語版 Approaches to Dementia Questionnaire (日本語版 ADQ) (19項目)
- (2) パーソン・センタード・ケアに関する実践評価：急性期病院の認知障害高齢者に対するパーソン・センタード・ケアをめざした看護実践自己評価尺度 (19項目)
- (3) 倫理に関する評価：臨床看護師の倫理的感受性尺度 (19項目)
- (4) 身体拘束の低減に関する自己効力感 (6項目)
- (5) 認知症看護関心・自信 (4項目)

### 4) 統計解析

統計学的分析に関しては多重検定法である Bonferroni 検定を用いてプログラム介入前 (ベースライン) と介入直後、3か月後、6か月後を比較した。統計解析は IBM SPSS statistics Ver.26 を用いて解析した。

### 5) 倫理的配慮

倫理面への配慮は、本研究はヘルシンキ宣言に基づき、浜松医科大学研究倫理審査会の承認を得て実施した。対象者には書面を通して研究の目的や方法、プライバシーの保護および研究成果の発表などについて説明を行った。本研究ではメールなど個人情報は研究事務局で管理し、研究者であっても閲覧できないように厳しく管理した。

### 4. 研究成果

102名の看護師から研究参加の応募があり、88名の看護師がベースライン時のアンケート調査(1回目)に回答した。4週間にわたり e-learning の内容を全て受講した者は77名であるが、本研究の分析の対象者は、ベースラインの調査からアンケート調査(4回目)に回答した7か月間追跡できた71名を分析の対象とした(図1)。対象者の臨床経験は  $13.5 \pm 9.5$  年であった。所属病棟は外科系が最も多く24名(33.8%)、次いで内科系、混合病棟がそれぞれ18名(25.4%)であった。認知機能障害のある患者の入院割合は「半分くらいいる」が最も多く30名(42.3%)、次いで「あまりいない」23名(32.4%)であった。対象者の役割はスタッフが最も多く56名(78.9%)で、認知症に関わるチームに所属していた人は6名(8.5%)であった。

評価指標の変化はベースラインと介入直後、3か月後、6か月後の比較を示した。認知症看護への関心・自信において、各項目に関して0から10の11段階で聞いた結果、認知症看護の関心ではベースライン  $7.54 \pm 1.81$  と比較して6か月後が他の項目と比べて最も高く  $8.26 \pm 1.87$  と有意に増加していた。「認知症看護の専門知識」、「認知症看護実践」ではベースラインと比較して介入直後、3か月後、6か月後はすべて有意に高かった。(表1)

本研究結果より、プログラムを受講した看護師は、パーソン・センタード・ケアの意識や、実践自己評価がプログラム受講直後、3か月後、6か月後と継続して向上していた。著者らのこれまでの研究では、特に認知症高齢者の視点の理解を疑似体験できる動画や模擬体験が、パーソン・センタード・ケアの理解に影響することを報告しており<sup>8,9)</sup>、認知症高齢者の一人称視点動画を含む本プログラムが、認知症の本人の視点や、本人の意思、価値を尊重したケアの重要性を意識づけ、自己評価の改善に繋がったものと考えられる。介入では2020年5月に4週間 e-learning を実施したが、短時間で、自分の都合の良い時間に簡単にアクセスできるという点も強みである。

表1 評価指標の変化(ベースラインと介入直後、3か月後、6か月後の比較)

評価指標	ベースライン		介入直後		Dunn ett's test <sup>1)</sup>	3か月後		Dunn ett's test <sup>1)</sup>	6か月後		Dunn ett's test <sup>1)</sup>
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	p値	平均値	標準偏差	p値	平均値	標準偏差	p値
<b>認知症看護関心・自信</b>											
認知症看護の関心	7.54	1.81	8.09	1.43	0.141	8.13	1.55	0.101	8.26	1.87	0.033*
認知症看護の看護の困難感	8.36	1.66	8.21	1.99	0.937	7.96	1.82	0.415	7.96	1.73	0.415
認知症看護の専門知識	4.39	2.27	5.49	1.48	0.001**	6.03	1.48	0.000**	6.04	1.56	0.000**
認知症看護実践	3.64	2.21	4.57	1.92	0.013*	4.99	1.81	0.000**	5.23	1.75	0.000**
<b>身体拘束を低減できる自信の程度</b>											
転倒・転落しないように、ベッドに 胴や四肢を縛る	6.64	2.81	7.33	2.52	0.260	7.76	2.249	0.027*	7.5	2.55	0.118
点滴・中心静脈・経管栄養などの チューブを抜かないように、ミトン 型手袋をつける	5.26	2.44	6.74	2.10	0.000**	6.27	2.085	0.020*	6.4	2.25	0.007**
車椅子や椅子などからずり落ちた り、立ち上がらないように腰ベルト を装着する	5.87	2.77	6.75	2.21	0.094	6.67	2.436	0.142	7.09	2.45	0.011*
服を脱いでしまう人やオムツはず じのある人に介護衣(つなぎ服) を着せる	6.30	2.71	7.23	2.44	0.080	6.71	2.588	0.647	7.45	2.37	0.022*
ベッドなどから転落しないように ベッドの周囲を柵など完全に囲ん だり、高い柵を使用する	6.00	2.74	6.83	2.48	0.162	6.30	2.747	0.843	6.77	2.65	0.208
興奮したり、穏やかでない人を置 きつかせるために向精神薬などを 使用する	5.49	2.30	6.33	2.02	0.067	6.22	2.141	0.135	6.38	2.33	0.050
合計	35.86	12.54	41.56	10.81	0.015*	39.93	11.83	0.113	41.58	12.17	0.014*
<b>看護師の倫理的感受性尺度</b>											
第1因子: 尊厳の意識	3.82	0.37	3.98	0.39	0.092	4.07	0.48	0.003**	4.04	0.49	0.008**
第2因子: 専門職としての責務	3.78	0.38	3.89	0.41	0.283	3.92	0.49	0.121	3.99	0.48	0.011*
第3因子: 患者への忠誠	3.75	0.39	3.95	0.39	0.022*	3.98	0.45	0.006**	4.05	0.46	0.000**
合計	11.35	0.97	11.83	1.02	0.046*	11.98	1.31	0.005**	12.11	1.33	0.001**
<b>急性期病院の認知障害高齢者に対するパーソン・センタード・ケアをめざした看護実践自己評価尺度</b>											
本人の視点を重視したケア	21.07	3.59	22.20	3.49	0.129	22.49	3.18	0.040*	22.44	3.38	0.048*
認知機能と本人に合わせた独自 性のあるケア	24.71	2.56	25.49	2.31	0.168	25.71	2.53	0.051	25.96	2.63	0.011*
起こりうる問題を予測した社会心 理的アプローチを含めたケア	22.41	3.59	23.61	3.49	0.102	24.17	2.99	0.008**	23.94	3.65	0.025*
本人の意思や価値を尊重したケア	13.61	2.14	14.21	2.08	0.253	14.49	2.06	0.048*	14.54	2.31	0.033*
合計	81.81	9.29	85.51	9.03	0.054	86.72	8.29	0.006**	86.84	10.3	0.005**
<b>日本語版Approaches to Dementia Questionnaire(日本語版ADQ)</b>											
希望	27.49	3.66	28.86	3.58	0.076	28.87	3.54	0.070	28.81	3.82	0.089
パーソンフッド	39.75	3.81	41.78	3.51	0.010*	41.29	4.76	0.068	41.39	3.92	0.047*
合計	67.24	5.80	70.64	5.20	0.002**	70.16	6.09	0.008**	70.42	5.76	0.004**

1)Dunnnett's test(ベースラインとの比較) 注: \*p<0.05, \*\*p<0.01

研究の行われた同時期は新型コロナウイルスの感染症対策の緊急事態宣言が発令され、院内の集合研修も全面中止された時期であるが、本介入はこのような時期でも自由に専門知識を習得することができたことは意義がある。また、本プログラムでは介入内容をまとめたポケット版を配布し、業務中に携帯することを対象者に勧めた。プログラムで学んだ内容を実践し、さらにポケット版を見て自身の実践をリフレクションすることで、パーソン・センタード・ケアの知識の効果的な看護実践における活用から、介入直後、さらに3か月後、6か月後と自己評価が向上したと考えられる。専門知識の介入プログラムと実践のプロセスにおいては、介入において自分の不足に気づくことで直後の自己評価が低下するが、その後、介入成果を意図的に活用して実践することで行動変容が生じ、自己評価が上がるのが指摘されている<sup>10)</sup>。特に本研究の対象者はベースライン時から認知症看護に関心が高い集団であったため、プログラムの参加、実践、リフレクションの繰り返しがより効果的になり、自己評価の改善に繋がった可能性がある。

本研究では、「身体拘束を低減できる自信の程度」のうち、「点滴・中心静脈・経管栄養などのチューブを抜かないように、ミトン型手袋をつける」「車椅子や椅子などからずり落ちたり、立

ち上がらないように腰ベルトを装着する」「服を脱いでしまう人やオムツはずしのある人に介護衣(つなぎ服)を着せる」が、ベースラインと比べて介入直後、3か月後、6か月後に有意に高かった。全国病院調査では、「ミトン型の手袋を使用する」と回答した割合は一般病棟では86.2%、急性期病院では依然として身体拘束の容認が報告され<sup>11)</sup>、多くの急性期病院において身体拘束の低減は大きな課題である。本研究では介入直後から6か月後まで継続して身体拘束を低減できる自信が高まっており、本プログラムは身体拘束の低減に向けても有用である可能性が示唆された。

## 文献

- 1)厚生労働省(2016):平成28年度診療報酬改定について。  
[http://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-12301000-Roukenkyoku-Soumuka/0000115365\\_1.pdf](http://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-12301000-Roukenkyoku-Soumuka/0000115365_1.pdf).
- 2)Nakanishi M, Okumura Y, Ogawa A: Physical restraint to patients with dementia in acute physical care settings: effect of the financial incentive to acute care hospitals. *Int Psychogeriatr* 2017; 10: 1-10.
- 3)Dawn Brooker and Isabelle Latham: Person-Centred Dementia Care, Second Edition, Making Services Better with the VIPS Framework, Jessica Kingsley Publishers, London, 2015.
- 4)Livingston G, Sommerlad A, Orgeta V, Costafreda SG, Huntley J, Ames D et al.: *Lancet*, Dementia prevention, intervention, and care. 2017; 390(10113):2673-2734.
- 5)Goldberg SE, Bradshaw LE, Kearney FC, Russell C, Whittamore KH, Foster PE, et al.: Care in specialist medical and mental health unit compared with standard care for older people with cognitive impairment admitted to general hospital: randomised controlled trial (NIHR TEAM trial). *BMJ*. 2013; 347:f4132.
- 6)Surr CA, Smith SJ, Crossland J, Robins J: Impact of a person-centred dementia care training programme on hospital staff attitudes, role efficacy and perceptions of caring for people with dementia: A repeated measures study.
- 7)Innes A, Kelly F, Scerri C, Abela S: Living with dementia in hospital wards: a comparative study of staff perceptions of practice and observed patient experience. *Int J Older People Nurs*. 2016; 11(2):94-106.
- 8)鈴木みずえ, 阿部ゆみ子, 鈴木智子, 篠崎恵美子, 吉村浩美: 急性期病院へのパーソン・センタード・ケア導入を目指した看護師研修の教育効果 せん妄のある認知症模擬患者プログラム. *日本認知症ケア学会誌* 2017; 16(3): 631-641.
- 9)鈴木みずえ, 吉村浩美, 水野裕, 金森雅夫, 長田久雄: パーソン・センタード・ケアをめざした認知症看護教育プログラムの効果 看護師に対する視聴覚教材(DVD)を用いた研修のリフレクション. *日本早期認知症学会誌* 2017; 10(1): 35-42.
- 10)Skilled interpersonal communication: research, theory and practice / Owen Hargie [electronic resource] Hargie, Owen, author. Sixth edition. Abingdon, Oxon; New York, NY: Routledge, 2017.
- 11)公益社団法人全日本病院協会: 身体拘束ゼロの実践に伴う課題に関する調査研究事業報告書平成28年(2016年)3月  
[https://www.ajha.or.jp/voice/pdf/other/160408\\_2.pdf](https://www.ajha.or.jp/voice/pdf/other/160408_2.pdf)

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計29件（うち査読付論文 13件 / うち国際共著 3件 / うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 曾根真璃苗, 鈴木みずえ	4. 巻 13(2)
2. 論文標題 医療療養病床における看護職のせん妄知識度合による看護実践の検討 せん妄知識高群と低群間での看護実践自己評価尺度(SSNP-PCC)の比較	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本早期認知症学会誌	6. 最初と最後の頁 32-39
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鈴木みずえ, 亀井智子	4. 巻 13(2)
2. 論文標題 パーソン・セントード・ケアの最新のエビデンスと展望 最新のメタアナリシスとその後の発展	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本早期認知症学会誌	6. 最初と最後の頁 15-21
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鈴木みずえ, Brooker Dawn, Bray Jennifer, 澤木圭介, 金森雅夫	4. 巻 57(4)
2. 論文標題 パーソン・セントード・ケアをめざした看護実践自己評価尺度による看護実践の英国と日本のWEB調査による比較	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本老年医学会雑誌	6. 最初と最後の頁 484-488
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.3143/geriatrics.57.484	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鈴木みずえ	4. 巻 23(1)
2. 論文標題 認知症を取り巻く課題と看護 排泄の訴えが多い認知症高齢者の行為の原因と転倒予防	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 コミュニティケア	6. 最初と最後の頁 33-35
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鈴木みずえ, 浅井八多美, 内山由美子, 阿部ゆみ子, 阿部邦彦, 澤木圭介, 田島明子	4. 巻 58(1)
2. 論文標題 介護老人保健施設における1年間の認知症ケアマッピング(DCM)の有効性 医療・福祉職の連携によるパーソン・センタード・ケアをめざした発展的評価が及ぼす効果	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本老年医学会雑誌	6. 最初と最後の頁 70-80
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.3143/geriatrics.58.70	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 神谷美保, 鈴木みずえ	4. 巻 14(1)
2. 論文標題 中小規模病院に勤務する看護職の認知症高齢者に対する看護実践と看護実践の卓越性の関係	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本早期認知症学会誌	6. 最初と最後の頁 46-54
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鈴木みずえ, 浅井八多美, 内山由美子, 内藤智義, 服部英幸	4. 巻 14(1)
2. 論文標題 介護老人保健施設におけるパーソン・センタード・ケアを基盤とした生活支障尺度を用いた実践ガイドの有効性	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本早期認知症学会誌	6. 最初と最後の頁 18-26
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 内藤智義, 鈴木みずえ, 阿部邦彦, 古田良江, 松井陽子, 大鷹悦子, 市川智恵子, 金森雅夫	4. 巻 7(3)
2. 論文標題 介護老人保健施設におけるパーソン・センタード・ケアを基盤とした認知症高齢者に対する転倒予防プログラムによるケアスタッフの多職種連携の意識変化 フォーカス・グループ・インタビューを用いた分析	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本転倒予防学会誌	6. 最初と最後の頁 39-47
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.11335/tentouyobou.7.3_39	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鈴木みずえ, 加藤真由美, 谷口好美, 平松知子, 丸岡直子, 金盛琢也, 内藤智義, 泉キヨ子, 金森雅夫	4. 巻 7(3)
2. 論文標題 介護老人保健施設ケアスタッフに対するパーソン・センタード・ケアに基づく転倒予防教育プログラム 北陸地方における認知症高齢者の転倒予防効果の検証と認知症の行動心理症状(BPSD)高群に対する介入の 検討	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本転倒予防学会誌	6. 最初と最後の頁 27-38
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 伊藤靖代, 鈴木全子, 鈴木みずえ	4. 巻 13(4)
2. 論文標題 急性期病院における看護師(中間管理者)の認知症看護実践・意識の変化 せん妄のある認知症模擬患者 (SP)プログラム研修後の体験	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 認知症ケア事例ジャーナル	6. 最初と最後の頁 278-286
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 菅野真紀, 鈴木みずえ	4. 巻 13(1)
2. 論文標題 地域女性高齢者の睡眠障害と心理・社会的要因との関連	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本早期認知症学会誌	6. 最初と最後の頁 49-57
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鈴木みずえ, 服部英幸, 猿原孝行, 金森雅夫	4. 巻 13(1)
2. 論文標題 施設入所中の認知症高齢者の生活支障(トラブル)に影響を及ぼす諸要因の検討 認知機能、ADL、BPSD、内 服薬等に関する重回帰分析	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本早期認知症学会誌	6. 最初と最後の頁 36-41
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -



1. 著者名 稲垣圭吾, 鈴木みずえ, 渥美友梨, 柘植美咲, 松崎花奈子, 鳥居史愛, 伊藤友孝, 谷重喜	4. 巻 7(1)
2. 論文標題 要介護ハイリスク高齢者の1年間の变化における握力と歩行機能、転倒要因 健康関連QOLの関連性 介護予防教室に通う高齢者を対象とした縦断研究	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本転倒予防学会誌	6. 最初と最後の頁 43-51
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.11335/tentouyobou.7.3_39	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鈴木みずえ, 内藤智義, 澤木圭介, 金森雅夫	4. 巻 7(1)
2. 論文標題 高齢者施設入所の高齢者に対する転倒予防介入とケアスタッフ・組織への教育介入のエビデンス システムティック・レビューに基づく課題抽出	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本転倒予防学会誌	6. 最初と最後の頁 33-41
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.11335/tentouyobou.7.3_27	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐藤香苗, 鈴木みずえ, 山内太郎	4. 巻 24(4)
2. 論文標題 認知症高齢者の安静時エネルギー消費量 認知機能別の比較と推定	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本生理人類学会誌	6. 最初と最後の頁 149-158
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.20718/jjpa.24.4_149	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鈴木みずえ, 松井陽子, 大鷹悦子, 市川智恵子, 阿部邦彦, 古田良江, 内藤智義, 加藤真由美, 谷口好美, 平松知子, 丸岡直子, 小林小百合, 六角僚子, 関由香里, 泉キヨ子, 金森雅夫	4. 巻 56(4)
2. 論文標題 パーソン・センタード・ケアを基盤とした認知症高齢者に対する転倒予防プログラムのケアスタッフに対する介入効果	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本老年医学会雑誌	6. 最初と最後の頁 487-497
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.3143/geriatrics.56.487	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鈴木みずえ	4. 巻 45(13)
2. 論文標題 認知症高齢者の尊厳を守る臨床看護実践能力シミュレーションプログラムの開発	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Medical Science Digest	6. 最初と最後の頁 814-815
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鈴木みずえ, 服部英幸, 阿部邦彦, 中村裕子, 猿原孝行	4. 巻 56(3)
2. 論文標題 介護老人保健施設における認知症高齢者の生活支障ケアプランニングツールの有効性 パーソン・セントラード・ケアを基盤としたケア介入の効果	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本老年医学会雑誌	6. 最初と最後の頁 312-322
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.3143/geriatrics.56.312	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鈴木みずえ, 吉村浩美, 長田久雄, 金森雅夫	4. 巻 12(1)
2. 論文標題 認知機能障害高齢者に対する看護実践上の自信の測定 急性期病院の看護における自己効力感の測定尺度の開発	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本早期認知症学会誌	6. 最初と最後の頁 52-59
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鈴木みずえ, 鈴木美恵子, 須永訓子, 吉村浩美, 宗像倫子, 森本俊子, 伊藤靖代	4. 巻 56(2)
2. 論文標題 急性期病院の看護師が実践する身体拘束の関連要因 看護師の自己評価調査を用いた分析	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本老年医学会雑誌	6. 最初と最後の頁 146-155
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.3143/geriatrics.56.146	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 朴 信江、鈴木 みずえ	4. 巻 17
2. 論文標題 有料老人ホームに勤務するケアスタッフのパーソン・センタード・ケアの意識と職場環境との関連性	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本認知症ケア学会誌	6. 最初と最後の頁 685-695
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鈴木 みずえ	4. 巻 15
2. 論文標題 気づきが実践となる福祉用具活用の手引き 転倒対策に必要な環境支援のエビデンス	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 臨床作業療法	6. 最初と最後の頁 472-476
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鈴木 みずえ、内藤 智義	4. 巻 76
2. 論文標題 老年医学(下)-基礎・臨床研究の最新動向-老年看護学 高齢者に特有な疾患への看護におけるアセスメントとケア 骨・運動器系疾患(骨粗鬆症・転倒・骨折)	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本臨床	6. 最初と最後の頁 733-737
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鈴木 みずえ、服部 英幸、阿部 邦彦、中村 裕子、猿原 孝行	4. 巻 55
2. 論文標題 高齢者施設における認知症高齢者の生活支障尺度の信頼性・妥当性の検討	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本老年医学会雑誌	6. 最初と最後の頁 386-394
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.3143/geriatrics.55.386	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 杉山 智子、梅原 里実、鈴木 みずえ	4. 巻 5
2. 論文標題 最新転倒・転落リスクアセスメントツールを求めて～現状の課題と展望～介護老人保健施設における転倒・転落事故予防の課題	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本転倒予防学会誌	6. 最初と最後の頁 61-63
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.11335/tentouyobou.5.1_41	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 征矢野 あや子、鈴木 みずえ、原田 敦、岡田 真平、上内 哲男	4. 巻 5
2. 論文標題 最新転倒・転落リスクアセスメントツールを求めて～現状の課題と展望～日本転倒予防学会会員を対象とする転倒・転落リスクを把握する方法に関する質問紙調査の報告	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本転倒予防学会誌	6. 最初と最後の頁 41-49
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.11335/tentouyobou.5.1_41	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Makimoto K, Kang Y, Kobayashi S, Liao XY, Panuthai S, Sung HC, Suzuki M, Terada S, Yamakawa M.	4. 巻 19(2)
2. 論文標題 Prevalence of behavioural and psychological symptoms of dementia in cognitively impaired elderly residents of long-term care facilities in East Asia: a cross-sectional study	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Psychogeriatrics	6. 最初と最後の頁 171-180
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1111/psyg.12395	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 Terada S, Yamakawa M, Kang Y, Kobayashi S, Liao XY, Panuthai S, Sung HC, Suzuki M, Makimoto K.	4. 巻 Jan 21
2. 論文標題 Variations and factors associated with psychotropic use in cognitively impaired elderly residing in long-term care facilities in East Asia: a cross-sectional study	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Psychogeriatrics	6. 最初と最後の頁 1-9
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1111/psyg.12395.	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 Yoko Higami, Miyae Yamakawa, Younhee Kang, Sayuri Kobayashi, Xiao-Yan Liao, Huei-Chuan Sung, Mizue Suzuki, Kiyoko Makimoto	4. 巻 0(0)
2. 論文標題 Prevalence of incontinence among cognitively impaired older residents in long-term care facilities in East Asia: A cross-sectional study	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Geriatrics & Gerontology International	6. 最初と最後の頁 1-7
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1111/ggi.13639	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 該当する

〔学会発表〕 計38件(うち招待講演 5件/うち国際学会 1件)

1. 発表者名 中村将人, 下田亜由美, 鈴木みずえ, 渡邊浩司, 山内克哉
2. 発表標題 高齢頭頸部がん患者における術前・術後の認知機能
3. 学会等名 日本作業療法学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 鈴木みずえ
2. 発表標題 重症認知症の人にどのような終末期対応を提供するのか-「認知症診療医」認定更新のために- 認知症高齢者の移動歩行能力への対応 転倒予防と身体拘束低減
3. 学会等名 日本精神神経学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 加藤真由美, 泉キヨ子, 鈴木みずえ, 上野栄一, 正源寺美穂, 飯田倫佳
2. 発表標題 新人看護師への転倒予防のための臨床判断と省察の支援に関する指導者の状況
3. 学会等名 日本転倒予防学会(招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 加藤真由美, 上野栄一, 鈴木みずえ, 泉キヨ子, 正源寺美穂, 飯田倫佳
2. 発表標題 転倒予防に係る省察、臨床判断力、身体拘束についての意識
3. 学会等名 日本看護科学学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 鈴木みずえ, 加藤真由美, 谷口好美, 平松知子, 丸岡直子, 金盛琢也, 内藤智義, 稲垣圭吾, 泉キヨ子
2. 発表標題 パーソン・センタード・ケアに基づく転倒予防教育プログラムの評価 認知症高齢者に対する転倒予防効果
3. 学会等名 日本看護科学学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 鈴木みずえ, 金盛琢也, 稲垣圭吾, 内藤智義
2. 発表標題 新型コロナウイルス流行下における急性期病院の認知症高齢者の心身機能の状況 認知症看護認定看護師に対するインタビュー調査の分析
3. 学会等名 日本認知症ケア学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 鈴木みずえ, Brooker Dawn, Bray Jennifer, 澤木圭介, 金森雅夫
2. 発表標題 病院におけるパーソン・センタード・ケアをめざした看護実践 認知障害高齢者に対する看護実践自己評価尺度の英国と日本の比較
3. 学会等名 日本認知症ケア学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 鈴木みずえ, 中西一美, 曾谷真由美, 小林みゆき, 佐藤晶子
2. 発表標題 病院における認知症バリアフリーへの挑戦 身体拘束の低減のための意識改革
3. 学会等名 日本認知症ケア学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 鈴木みずえ
2. 発表標題 多職種で取り組む転倒・転落予防 施設内における転倒・転落の予防
3. 学会等名 日本骨粗鬆症学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 鈴木みずえ, 内藤智義, 加藤真由美, 谷口好美, 平松知子, 丸岡直子, 小林小百合, 六角僚子, 泉キヨ子
2. 発表標題 パーソン・センタード・ケアを用いた老人保健施設における転倒予防プログラムのケアスタッフに対する効果 ケアスタッフの認知症や転倒予防に対する意識の変化
3. 学会等名 日本看護科学学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 加藤真由, 泉キヨ子, 鈴木みずえ, 上野栄一, 正源寺美穂
2. 発表標題 経験の浅い看護師を対象にした転倒予防のための臨床判断力育成に係る省察の仮説モデル
3. 学会等名 日本看護科学学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 杉山智子, 梅原里実, 鈴木みずえ
2. 発表標題 転倒・転落アセスメントツールの新たな展開 介護老人保健施設における施設管理・システムと転倒予防との関係 転倒・転落アセスメントツールの観点から
3. 学会等名 日本転倒予防学会(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 鈴木みずえ, 征矢野あや子
2. 発表標題 転倒・転落アセスメントツールの新たな展開 転倒・転落アセスメントツールの新たな展開 転倒・転落アセスメントツール検討委員会の最終報告
3. 学会等名 日本転倒予防学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 鈴木みずえ, 服部英幸, 阿部邦彦, 中村裕子, 猿原孝行
2. 発表標題 認知症高齢者の生活支障ケアプランニングツールを用いたケア介入の効果
3. 学会等名 日本早期認知症学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 戸田真弘, 鈴木みずえ, 長島正明, 高尾昌資, 高橋大生, 増田貴行, 永房鉄之, 山内克哉
2. 発表標題 高齢心臓外科手術患者の術後リハビリテーション経過にフレイル・抑うつ状態が与える影響
3. 学会等名 日本循環器学会
4. 発表年 2019年



1. 発表者名 鈴木みずえ, 黒川美知代
2. 発表標題 高齢者の転倒を考える 転倒リスクアセスメントの課題と今後の転倒予防対策
3. 学会等名 日本老年医学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 鈴木みずえ
2. 発表標題 老年学における認知症研究の最前線 看護学における認知症研究の最前線
3. 学会等名 日本老年医学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 1鈴木みずえ, 服部英幸, 大城一, 猿原孝行, 古田良江, 阿部邦彦, 内藤智義, 福田耕嗣, 金森雅夫
2. 発表標題 認知症高齢者のADL、BPSDと認知機能がケア依存度に及ぼす影響
3. 学会等名 日本認知症ケア学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 服部英幸, 寺田整司, 鈴木みずえ, 尾之内直美, 牧陽子, 山野目章夫
2. 発表標題 当事者・家族・医療者・法律家からみた認知症の人の生活支障(トラブル)の発症機序とケア(会議録).
3. 学会等名 日本認知症ケア学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 鈴木みずえ
2. 発表標題 認知症高齢者の意思決定の支援 その人の思いを聞くこと
3. 学会等名 日本早期認知症学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 加藤 真由美、泉 キヨ子、鈴木 みずえ、上野 栄一、正源寺 美穂
2. 発表標題 看護師の臨床判断における転倒につながる「ふらつき」の言語化
3. 学会等名 日本看護科学学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 鈴木 みずえ、吉村 浩美
2. 発表標題 急性期病院における認知障害高齢者に対する看護実践自己効力感尺度の検討
3. 学会等名 日本看護科学学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 内藤 智義、鈴木 みずえ、古田 良江
2. 発表標題 介護施設における排泄障害を伴う認知症高齢者への転倒予防ケアの構造 看護職・介護職のチームアプローチに焦点を当てて
3. 学会等名 日本転倒予防学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 稲垣 圭吾、渥美 友梨、柘植 美咲、鳥居 史愛、松崎 花奈子、伊藤 友孝、谷 重喜、鈴木 みずえ
2. 発表標題 在宅高齢者の筋力の1年間の变化と歩行機能、転倒要因、健康関連QOLの関係
3. 学会等名 日本転倒予防学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 清水 美香、伊藤 湯加理、鈴木 みずえ
2. 発表標題 急性期病院における脳卒中患者に対する転倒・転落予防ケアに関する研究 ベテラン看護師へのインタビュー調査から
3. 学会等名 日本転倒予防学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 金森 雅夫、鈴木 みずえ、平松 知子、加藤 真由美、谷口 好美、丸岡 直子、六角 遼子、小林 小百合、島田 裕之、泉 キヨ子
2. 発表標題 認知症高齢者の転倒予防ケア質評価指標によるケア介入プログラムの効果 3地区における1日あたりの転倒の発生率に関する分析
3. 学会等名 日本転倒予防学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 丸岡 直子、谷口 好美、加藤 真由美、平松 知子、鈴木 みずえ
2. 発表標題 認知症高齢者の転倒予防ケア質評価指標によるケア介入プログラムからの学びと活用 北陸地区ケアスタッフのインタビューから
3. 学会等名 日本転倒予防学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 古田 良江、鈴木 みずえ、松井 陽子、大鷹 悦子、市川 智恵子、阿部 邦彦、内藤 智義、島田 裕之、金森 雅夫
2. 発表標題 介護老人保健施設における認知症高齢者に対する転倒予防に関する介入プログラムの効果
3. 学会等名 日本転倒予防学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 谷口 好美、平松 知子、加藤 真由美、丸岡 直子、能登 智重、前田 直大、鈴木 みずえ
2. 発表標題 認知症高齢者の転倒予防ケア質評価指標によるケア介入プログラムの効果 北陸のケアスタッフの転倒予防に対する意識変化の比較
3. 学会等名 日本転倒予防学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 杉山 智子、梅原 里実、鈴木 みずえ
2. 発表標題 最新転倒・転落アセスメント・ツールの展開 転倒予防の観点からみた介護老人保健施設における施設管理・システムに関する実態調査
3. 学会等名 日本転倒予防学会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 鈴木 みずえ
2. 発表標題 転倒予防学における課題と構築 認知症高齢者の転倒予防の取り組みから
3. 学会等名 日本転倒予防学会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 鈴木 みずえ
2. 発表標題 高齢者の転倒予防対策 転倒リスクアセスメントツールを活用した転倒予防対策と認知症高齢者に対する転倒予防(看護の立場から)
3. 学会等名 日本老年医学会(招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 鳥羽 研二、石橋 英明、神崎 恒一、近藤 和泉、鈴木 みずえ
2. 発表標題 今後の転倒予防研究の行方と現場での応用
3. 学会等名 Loco Cure
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 尾之内 直美、服部 英幸、牧 陽子、鈴木 みずえ、寺田 整司、山野目 章夫
2. 発表標題 認知症の家族介護者が経験する社会的な生活支障とその支援についての検討
3. 学会等名 日本認知症ケア学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 内藤 智義、清水 隆裕、鈴木 みずえ、古田 良江
2. 発表標題 特別養護老人ホームにおける看護職が実践している認知症高齢者への排便ケアの構造
3. 学会等名 日本認知症ケア学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 鈴木 みずえ、松井 陽子、大鷹 悦子、市川 智恵子、古田 良江、阿部 邦彦、内藤 智義、金森 雅夫
2. 発表標題 認知症高齢者に対する転倒予防に関する介入研究 介護老人保健施設におけるケアスタッフの意識の変化
3. 学会等名 日本認知症ケア学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 吉村 浩美、鈴木 みずえ
2. 発表標題 急性期病院におけるパーソン・センタード・ケアをめざした看護実践自己評価尺度の変化
3. 学会等名 日本医療マネジメント学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Mizue Suzuki, Hiromi Yoshimura, Yasuyo Ito, Masao Kanamori,
2. 発表標題 Correlations between the Self-Assessment Scale of Nursing Practices for Elderly Patients with Cognitive Impairment (SNPCI) and the Clinical Nursing Competence Self-Assessment Scale (CNCSS) among nurses in acute care hospitals
3. 学会等名 21st International Association of Gerontology and Geriatrics (IAGG) World Congress in San Francisco (国際学会)
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 鈴木みずえ (編集), 黒川美知代 (編集)	4. 発行年 2020年
2. 出版社 日本看護協会出版会	5. 総ページ数 144
3. 書名 認知症 plus 身体拘束予防 ケアをみつめ直し、抑制に頼らない看護の実現へ	

1. 著者名 鈴木 みずえ	4. 発行年 2019年
2. 出版社 日本看護協会出版会	5. 総ページ数 248
3. 書名 認知症plus転倒予防 せん妄・排泄障害を含めた包括的ケア	

1. 著者名 鈴木 みずえ、内門 大丈	4. 発行年 2019年
2. 出版社 池田書店	5. 総ページ数 224
3. 書名 3ステップ式パーソン・センタード・ケアでよくわかる 認知症看護のきほん	

1. 著者名 鈴木 みずえ(編集)、高井 ゆかり(編集)	4. 発行年 2018年
2. 出版社 日本看護協会出版会	5. 総ページ数 215
3. 書名 認知症の人の「痛み」をケアする 「痛み」が引き起こすBPSD・せん妄の予防	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	酒井 郁子  (Sakai Ikuko)  (10197767)	千葉大学・大学院看護学研究院・教授   (12501)	
研究分担者	御室 総一郎  (Mimuro Soichiro)  (90464114)	浜松医科大学・医学部附属病院・講師   (13802)	

## 6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	内藤 智義  (Naito Tomoyoshi)  (90632422)	浜松医科大学・医学部・助教    (13802)	
研究分担者	佐々木 菜名代  (Sasaki Nanayo)  (90816464)	浜松医科大学・医学部附属病院・看護部長    (13802)	
研究分担者	稲垣 圭吾  (Inagaki Keigo)  (90825621)	浜松医科大学・医学部・教務補佐員    (13802)	
研究分担者	松下 君代  (Matsushita kimiyo)  (90831785)	聖隷クリストファー大学・看護学部・臨床教授    (33804)	
研究分担者	金盛 琢也  (Kanamori Takuya)  (80745068)	浜松医科大学・医学部・講師    (13802)	
研究分担者	古田 良江  (Furuta Yoshie)  (60813706)	浜松医科大学・医学部・教務補佐員    (13802)	削除：2020年2月10日
研究分担者	澤木 圭介  (Sawaki Keisuke)  (70869940)	浜松医科大学・医学部・教務補佐員    (13802)	追加：2020年2月10日
研究分担者	吉村 浩美  (Yoshimura Hiromi)  (10573793)	聖隷クリストファー大学・看護学部・臨床教授    (33804)	



7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------